せたかむい
発行・古平町史編さん室
文化会館 ☎42-2590
第201号・平成18・6・1

年表で読む 古平の歴史

《106》

畜産業

小家畜

馬や乳牛以外の家畜は、副業としてわずかに飼育されていたようだが、一応、小家畜としてまとめてみた。

◇養　豚

豚はいつ頃から飼育されていたのかはっきりしないが、明治二三年に五頭飼育されていたことが勧業年報に載っている。

大正一一年からの古平町治要覧では、大正一〇年、豚・緬羊が一七頭とあり、同一二年～一四年には豚・緬羊・山羊が五頭とあるが、その内訳は分らない。

それ以後、戦後の一時期、大規模な飼育が行われるまで記録にはない。

◇養　鶏　①

明治末にはニワトリの外、古平川河畔でアヒルも飼育されていたという記録があるが、古平町統計書にはない。家庭で飼育されていた程度の、ごく小規模のものであろうと思われる。

明治四三年、後志支庁の家禽調査によると、古平町の飼育状況は次ぎのようである。

飼育戸数	
十羽未満	一八〇戸
～五十羽未満	一二〇戸
～百羽未満	六戸
百羽以上	一戸

この内、成鶏（卵を生んでいる鶏）が一・〇二〇羽、雛が一・一五〇羽で、年間の産卵数は七八・四〇〇個とあり、前年度より戸数・羽数の増加しているのは、副業として飼育する者が多くなったことを理由にあげている。成鶏は一羽一円二〇銭、雛は一八銭とある。

古平町の人口は明治二八年～昭和二〇年までの五十年間、人口七千人代を維持してきたが、農業戸数は専業・兼業（農業を主とする）を合わせて五五〇戸、さらに農業を従とする二四〇戸余りを合計すると七九〇戸と、漁業に次いで多い。専業農家では、庭先や簡単な飼育小屋でニワトリを飼っていて、貴重な現金収入としていた。

古平町では大正九年四月、第一次世界大戦後の不況の時代に対処するため、町民に副業を奨励し、収入増加の方法を講じようと『副業奨励補助規定』を設定した。

副業奨励補助規定

第一条　副業奨励のためこの規定によって、毎年、予算の範囲で、次ぎに該当するものに対し補助金を交付する

1. 養鶏をする者
2. 養蚕をする者（カイコ）
3. 副業のために必要な器具などを購入する者

第二条　補助金を受けようとする者は次ぎの事柄を書いて補助申請すること

1. 養鶏は飼育羽数
2. 養蚕は掃立枚数
3. 器具などを購入する者は名称、個数、予定価格

第三条　（以下省略）

補助を受けた者は八人で、その金額は三九円六〇銭とある。

大正六年～同一四年までの町勢要覧では、飼育羽数だけが次ぎのように載っている。

大正六年	八二二羽
七年	八二九羽
八年	一・一五四羽
九年	一・四八五羽
一〇年	一・四八五羽
一一年	一・五五三羽
一二年	一・五五五羽
一三年	一，五七一羽
一四年	一・五二五羽

高野名幸作さんの日記から
当時の世相を見る
〈112〉

大正十四年

▼一月一日

心地よく休んでいたが、時計が四時を打つと目が覚めた。早速起床、礼服を着て、洗面後神仏を拝し、大正一四年の家内安全と商売繁盛を祈る。今朝は祝聖会の読経会があるので四時二〇分出かけた。静かで風も無い、空からは雪が静かに降っている。恵比須神社に参拝す。暗夜に大電球の光るのも神々しい。のち禅源寺へ参る。全員が来ている、年の初めで読経も今日は殊更丁寧だ、今上天皇陛下の御代を祈り、読経を終えたら五時半、和尚の部屋で新年を賀し、茶菓を馳走になる。年始として酒肴の馳走を受け、六時半ほのぼのと明るくなった頃に辞す。その足で郷社(琴平神社)を参拝、成田山に参り、ヨに寄る。港町弁天さん(厳島神社)に参り、八時頃帰る。

▼一月二日

今日は初売り出しの日だ。五、六年前だと、午前二時頃からドヤドヤたくさんの人通りで賑やかだったが、この頃は二日の初売りもさびしくなった。五時起床、六時になっても人通りはない、呉服屋の前など例年なら人が黒山になっていたが、今年はさびしい。六時半、板戸を開けたが雪が静かに降っている。予想外のヒマだ。昨年、一昨年と刺網の不漁で、漁具の仕込みの方も元気がないのでサッパリ売れない。合計八五円ほど、実に予想外の不況だ。呉服屋、荒物屋もさびしかったようだ。夜、禅学会寒修行披露のビラを書く。

▼一月三日

今日は朝から吹雪が激しい。年始客がチョイチョイ来る、缶、平、吉が来ていろいろ話す。カレ網相当の漁だったが、値段が暴落のため不況で甚だしいとのこと、三時頃、小樽㊥君が来ていろいろ話す。一一時頃、ヨ姉が子供達と五人で遊びに来た。二階で本の子供三人、家の子供六人、合計一三人も集る。馳走を出す、なかなか賑やかだ。こんな無邪気な時代が一番楽しい。可愛いいものだ。

▼一月四日

天気は良いが寒い、近頃にない厳しいことだ。今日はヨで、我が家と本の子供達を招待してご馳走するとのことで、子供達は大喜びだ。一一時頃に妻と幸治、文治、吉治、トミ、悦三の大一行が行く、四郎は家にいる、家の中は大波の引いた後の海のようにヒッソリとしている。

▼一月五日

早正月も五日となった。少年時代や二五、六歳の頃までは正月も相当に面白おかしかったが、五人もの親となり、今責任を負って、この渡世の荒波を渡らねばならぬと自覚すれば、ウカウカしておれぬようで、正月とて面白いとばかり思ってもおられぬ。何しろ世の中はますますセチ辛くなり、生存競争も激しくなるので、商売をしていてもゆるくないのだ。今日はどこへも出ずコタツにあたる。リンゴ買いがずい分来る、今日も五円ほど売った。

▼一月六日

起床七時半、店は閑散だ。海はナギ、漁船も出た。一枝さん午後の船で来られた。店はリンゴの売れること予想外だ、一〇円も売れた。今日から寒の入りで、四時半頃、支度して禅源寺へ行く。寒修行の一行一〇名ほども集っている。浜中から港町、入船町、新地町を回り、入床屋で終わり休む。途中から加わった人もいて合計一八名、今日の分は米一斗、金一三円八〇銭であった。九時帰る。明日は幸治が帰るというのでいろいろ支度する。

▼一月七日

快晴、起床七時半、静かな空だ。今朝は幸治が小樽の学校へ帰るので、土産やら何やら支度で忙しい。八

年賀状の返事など出す。新地亘で網を一〇円八〇銭で売るとのことなので、一、〇〇〇間買うことにした。平田で今売っている相場だ。子供等が五時頃、ご馳走になって面白かったと喜んで帰って来る。家の中がまた急に賑やかになった。

時半出かけた。子供等と浜まで送る。学生連中が帰るのが多く船も満員、船は予定より遅れ一〇時半出帆したとのこと。上ナギで幸いであった。店はリンゴとタコ糸の客ばかり、刺網二〇〇間出た。今日は五時頃から寒修行に**深ぐつ**をはいて出かける。天気は良いし、十三夜の月こうこうとして良夜だ。一七名で読経して歩く。港町、入船町、新地町を歩き浜町方面は明日にする。今日は米一斗、一〇円余りあった。禅源寺に帰って休み、九時家に帰る。

※ **深ぐつ** ＝深わらぐつともいうが、ゴム長靴が普及するまでは最も一般的な冬のはきものであった。農家の人達にとっては農閑期の副業でもあった。

↑一般的な深ぐつの形、足を入れるところを布で縁とりして履く人もいた

▼一月八日

起床七時半、朝からの青空で天気快晴、店は閑散、カレ網ナギで漁も相当あるが値段が安いとこぼしている。熊さんがカレを買いに行ったら一貫目一〇銭、一〇銭で大きなアサバが六枚だ、近年にない安いことだ。リンゴは毎日五、六円売れている。珍しい好天気なので子供等は皆戸外へ出て遊んでいる。ちょうど三、四月頃のような天気だ。寒修行三日目、浜中、沢江を回る日だ、五時半出かける、今日は二〇名だ、寒さは強いが月光が輝き一天雲無き良夜、銀世界の如き景色に大勢で読経して歩くのもたしかに修行だ。八時終わる。今日は米一斗、一四円ほどある。

▼一月九日

起床七時、この頃寒修行で運動するので夜も気持ちよく眠れる。心身の修養と壮健になる。店は閑散、刺網は昨年はずい分出たが今年は出ない。五時から寒修行、今日で四日目だ、新地町方面を回る、昨夜より暖気で運動になる。この日は一九名で米一斗、八円五〇銭あった。八時入で解散、帰途三に寄りしばらく話し一〇時帰る。

▼一月一〇日

天気快晴、起床八時、寒中とはいえ暖気で静かな空だ。店は閑散、明日、帳祝いなので支度する。天気が良いので雪下ろし、雪割りなどする。寒修行に五時半出かける。沢江から浜中、畑方面を回る。十六夜の月がこうこうとして良夜だ。海も上ナギ、月光が波に輝いて実に良い眺めだ。心身爽快だ。八時に終わり、寺で帳簿に記入し九時帰る。米二斗五合、一〇円余りある。

▼一月一一日

起床八時、天気快晴、屋根の雪下ろしをやる。暖気で雨だれが落ちている。今日は**「帳祝い」**の日、帳面の上書き、通帳の準備などする。四時、帳祝いの馳走がある。五時から寒修行に出る。十七夜の月光が輝いて実に良い景色だ。声を張り上げ読経して歩けば何物も忘れ、俗界を離れたような気分で心身爽快だ。新地町方面を回り入で解散。家に帰ったのは八時半、この日、米一斗、六円余りであった。小樽新聞に「小樽岡崎で買った別荘用の神代杉は千二百年前のもので、実に稀なる珍木とのこと」

※ 帳祝い（ちょういわい）＝帳祭と言うところも多い。江戸時代からの商家の慣わしとして、一月一一日、（または四日）に行われ、この日は氏神様に帳面を供え、その参詣の途中で帳面を買うとご利益があると言い、この日にその年に使う帳面をとじたり、表紙などを書いたりする。また、当時は現金買いが少なかったので、得意先への『通帳』を作り配った。現在では全く行われていないようである。

▼一月一二日

起床八時、朝から風が吹き時化模様になる、長らく天気が続いたから荒れるだろう。熊さんは屋根の雪下ろし、ずい分積もる。一一時頃田木戸さんが来て商用を足したあと昼食を出す。今日も五時から寒修行に出る。今夜は沖風が吹いて寒さが強い。洋服にまかなって出たが、沢江の橋の上などは身を切るような寒さ、六時半、私の家の店で一行一六名休憩、茶とリンゴを出す。八時に終わったが、米三升、二円八〇銭で一番少なかった。

▼一月一三日

昨日来の大吹雪は今日も一日中吹く。板戸を閉め帳簿の整理をする、吹雪が甚だしく停電で町中は真っ暗になる。五時から一行一九名で歩く、新地方面を回り、七時

半解散する。のち 本 支店で火防組合の慰労会で酒肴の馳走がある。一一時帰る。

▼一月一四日

大雪、板戸を閉じている。店はヒマで、刺網連中一般に元気が無いので漁具も売れない。五時から出かけ浜町方面を回る、米三升、四円八〇銭ほどであった。

▼一月一五日

今朝は祝聖会の例会、五時に目を覚ます、水で顔を洗い五時半出かける、昨夜来の吹雪はまだ止まず、ところどころに吹きだまりがある。本堂で読経中もずい分寒かった。六時半に終わり、和尚の部屋で話し、七時半帰る。ユキちゃん今日は休ませて家へやったが、喜んで行った。海は時化、吹雪はなかなか止まぬ、一二日以来、余市通いの船も休んでいる。

▼一月一六日

先日来の時化、今朝になり少しナギる。店は閑散、リンゴは売れている。午後、余市からようやく船便があり、本 主人も五日間も船待ちをして帰られた。この夜、火防組合慰労会が美登利であり、ずい分と馳走もあり、八時半に終わり帰る。寒修行今夜は一日休む。

▼一月一七日

今朝は大吹雪、大時化となった。一枝さんら古英丸で来る予定だったが、この時化で見合わせる。冬は不便なところだ、吹雪が止まぬので板戸を閉じている。寒修行に出たが、この吹雪でなかなかゆるくない。丸山町の松田さんで観音講があるというので招待され、酒にお布施をいただく。新地、港町方面を回り、港町の高橋さんで茶菓を出され、帰ったのは八時、吹雪はますます激しく海は大時化だ。

▼一月一八日

起床八時、今日も吹雪で時化が続く。毎日毎日よく荒れることだ。店のコタツにあたって新聞を見るのが仕事のようだ。五時から寒修行、浜町を回り七時に終わる。のち禅源寺で観音講の馳走があり、九時に帰る。

▼一月一九日

起床八時、今日は先祖の命日、洗面後、仏前で観音経を読経する。熊さんは鎌田さん、天野さんらと屋根の雪下ろしをやり、終わって店の前の雪引きをやる。二時頃からまた大吹雪になり、外の仕事を止める。一二日以来毎日のように荒れている。佐渡 ㊍ へ無尽の金を送金する。田 木戸さん来て夜食を出す。五時から寒修行に出て新地方面を回ったが吹雪が激しく、七時半に終わる。今夜は 本 主人も出た。八時帰る。木戸さんといろいろ話をする。

▼一月二〇日

吹雪、時化

▼一月二一日

今日は一枝さんの婚礼日。港町の姉も手伝いに来る、外浜丸で一枝さんと兄さんが来る、姉さんが来ると聞いていたが聞き違いだったようだ。今日は久しぶりでカレ網も出た。家では晩の支度で忙しい。八時迎えが来て、二階で形ばかりの式をし、一〇時 本 へ行く。馳走があり、午前三時半ようやく帰る。先ずはめでたく整え安心した。

▼一月二二日

起床八時、昨夜、一枝さんの祝言でずい分おそくなった。本 から帰ったのは三時半、四時半に休む。今日は後片付けなどでゴタゴタしている。兄さんは午後一時の外浜丸で帰られ、私等は浜まで見送る。一枝さんが来て新婚の記念写真を撮りに行く。その後、寒修行に回ったが、今夜は静かな良い天気になった。沢江方面を回り、支店で甘酒と鍋焼きの馳走になり、九時帰る。

▼一月二三日

起床八時、小樽から網屋連中が得意先回りに来る。本年は網類が高いのでなかなか売りにくい。五時から寒修行、新地方面は浜中より上りがあるようだ。寒かったが星が満天に輝いて静かな良夜で、ナギもよい。八時帰る。

▼一月二四日

起床七時、天気快晴、旧の元旦だが特にない。余市 セ 店員が来たが、今回は別に注文品も無い。熊さんは傘、天野、鎌田さんらと雪引きをやる。午後一時から寒修行に沖村へ行くことになり、一行一五名で出かける。道路は悪いが天気が良い、田岸別家で休みソーメンを馳走になり、帰ったのは五時であった。

▼一月二五日～二八日

（記入なし）

▼一月二九日

起床八時、寒さは厳しい、月末だが書き出しを書くほどのところもない。寒修行二日休んだが、今日は頭の具合も良いので出かけた。新地

方面を回り帰ったのは八時。雪が降り出し九時頃吹雪になる。

▼一月三〇日

寒さが厳しく、吹雪で海も時化る。

▼一月三一日

月末で熊さんは新地方面の掛け取りに出かける。一二時頃に余市から高太郎さん、今着いたが船がなくて行かれぬと電話が来た。早速、陸行するよう言ってやる。二時出発したと電話があり、熊さんを迎えにやる。九時、高太郎さんらが着く。雪道の悪路で非常に難儀したという。私は五時から新地方面の寒修行に出て八時帰る。小樽の話などをして一二時休む。

▼二月一日

聞けばこの日、沢江吉田さんの子供、一三歳の男の子と七歳の女の子が、警察で野犬毒殺用の毒マンジュウを食べて死亡したとのこと、実に可愛そうなことをした。今朝は祝聖会の例会、五時起床、水で顔を洗うがなかなか冷たい、五時二〇分出かける。雪が五寸くらい積もっている、寒くそして吹雪いている。西村、竹浪両君と同道し、寺の台所であたり、五時半から読経が始まる。六時半終わり、和尚の部屋で話し、八時帰る。今日は観音滝参詣を兼ね、泥の木へ寒修行の日で、九時半出発、時々吹雪いて寒さもきびしい。一〇時半、木村君のところへ着く、それより山道に入り、雪が深く難行、一時間ほどで観音滝に着き、観音経をあげて一二時半帰途につく。一時過ぎ泥の木に着き昼食、二時出発、寒修行をしながら四時ビヤホールに着き、鍋焼きを食べる。浜中を回って七時帰る。夜に入り吹雪激しく海は時化る。

▼二月二日

昨日、沢江吉田さんの子供二人が、毒マンジュウで死んだのは近来に無い大事件だ。可愛い子供二人まで死なせてしまった親の気持ちはどんなだろう。巡査の落としたのも実に手落ちである。

▼二月三日

今日は寒修行の最終日。新地方面と浜中方面の二手に分かれて歩く。私は浜中を回る。最初沢江から回ったが、吉田さん宅に寄り修証義をあげる。位牌が二つ並んでいるのを見て何とも言えず可愛そうである。浜中を回り終えたのは八時、この日は予想外の収入があり、浜中方面米二斗六升と二八円、新地方面米四斗以上、二九円あった。

▼二月四日

寒修行も昨夜で終わり重荷を下したような気分だ。午後一時から禅源寺に集り決算をする。現金二三〇余円、三時頃記念撮影をし、終わって観音経をあげ、五時から酒肴が出て八時過ぎ帰る。

▼二月五日

昨夜の寒修行の決算慰労会では少し飲み過ぎたようだ。店はいたって閑散、青空にカンカン陽がさして春が来たようだ。夜は原田さんで部落会の例会があり行く。帰り本に寄ったら和尚さんもおり、いろいろ話をし一一時帰る。

▼二月六日

天気快晴、店は閑散、例年なら刺網の支度で忙しいのだが、二年の不漁続きで一向に元気がない。夜、依頼された寒修行決算報告書を書く。

▼二月七日

今日は珍しいほどの晴天、鰊場が来たようだ。和尚さんから依頼された寒修行決算書を仕上げる。佐渡からアバ縄、長竹などを積んだ船が来た、今年の一番船だ。私のところでは昨年分もあるので仕入れぬ。午後一時頃、電気会社の高橋さんが来て、丸山山頂まで電灯をつける計画があり見に行かないかと誘われ、長野君ら四人で行く。新地学校の横から登ったが三〇分ほどで頂上に着く。四方の眺望が実にすばらしい、飛行機にでも乗っているような気分、二時下山し、三時家に着く。いい運動であった。

▼二月八日

大吹雪、七時起床、仏前で一時間ほど読経する。九時頃から一寸先も見えぬ大吹雪となる。漁船も出ないから心配はない。港町「ヨ」倉からアバ縄を運搬、倉に入れる。大吹雪も三時頃から次第におさまったが、近頃で一番寒い日であった。

▼二月九日

雪が降り今日も寒い寒い一日だ。例年なら今頃は忙しいのだが、店は閑散としていて、これではまるで遊びだ。これも昨年の刺網の不漁のせいだ。カレ網も安い、不況が悪いのだ。父は近日中佐渡へ行くとていろいろ支度をしている。リンゴは1号、49号が売れ切れて、7号を売っている。一〇〇匁七銭で相当に売れている。

〈続く〉

古平の民話

数の子蔵破り

チョペタン川の岸で、古平運上家の二八蔵さんはじっと川の流れを見つめていました。

それはこの頃、ニシンの数の子蔵に何者かが忍び込み、数の子を運び去り、その者はどう考えてもこの川を渡って来るらしい、と思ったからでした。

二八蔵さんは、川上から川下にかけて向こうの川岸を見つめると、向こうの川岸の中ほどに、かすかに草を倒し、細い木を倒したらしいところを見つけました。

急いで浅瀬をこいで行って見ると、想像したように、そこには人の足跡らしいものがありました。やっぱり川を渡って数の子を運んで行ったのか、よし、きっとつかまえてやるぞと、その日の来るのをじっと待っていました。

それから数日経ったある月夜の晩のこと、裏の数の子蔵の方で、異様な物音がするのに気づいた二八蔵さんは、そっと裏口を抜け出して、数の子蔵の方に行って見ました。

よく見ると蔵の中に何者かが忍び込んで、数の子のかますを動かしているようでした。それは一人や二人ではなく、中にはものすごく大きい人もいるようでした。

これは変に手出しをしてケガでもしたら大変と、家中の者の助けを頼んで押さえねばならぬと思いました。大急ぎで戻り、泥棒を取り押さえる助けを頼みました。皆はおそるおそる蔵のところに来て見ると、蔵の戸は開けられたままで、中には誰もいませんでした。

「しまった！」

と思ったが、どうしようもない。どのくらい数の子を運んだのかわからないが、スーッと川の方に向かって、一列に数の子が落ちていました。その数の子をたよりに川岸まで来ると、そこで数の子の列はぷつつり切れていました。

「きっと、この川を渡ったに違いない」

と言いながら皆で川を渡りましたが、暗くてよくわかりませんので、明日の朝早く探すことにして引き返しました。

翌朝、東の空が白みかかると、昨夜渡った川を再び渡り、草を踏み分けた道を進みました。しばらく行くと、踏み倒された草はぱったりとなくなりました。よく見ると、そこには大きな、ぼたり、ぼたりと熊の足跡がついていました。

二八蔵さんは、これはとんでもないところに来た、今ここに出られたらどうしようと思うと、それより先、進むことができませんでした。

「近くに熊がいるぞォ！　みんな用心しろ」

と、みんなは口々に叫んで辺りをうかがうと、すぐそばの大きな木の根元から笹のふれ合う音が聞こえました。一人の男がそっと笹の葉の方を見ると、その瞬間、まっ青な顔になり、そばにいる人達に小声で、

「熊がいる、大きなヤツだ。木の根を枕に寝ている。早く逃げることだ」

と言いました。これを聞いた二八蔵さんは、

「ナーニ、皆で向かっていったら討ち取れないこともない。やってしまうべ」

と、手に持って来たくわや鎌を

思い出すこと
わが家の子猫

池田テル

浜町の市外のはずれに、昔からの川がまだ流れていた頃のことです。

私が小学生二人と中学生二人、そして、主人を何時ものように職場へ送り出し、ひとりとなったその時です。勝手口の方で何か人の声がするのです。

誰かと思って行って見ると、なんとそれは今しがた、学校へと玄関から出て行った二年生のわが子でした。私を見るや、

「これ…」

と言って差し出したのは、ボロ布にくるんだ一匹の子猫でした。

「川の側で拾ったんだ」

と、早口で言う。

「わかった、引き受けたから…」

と言う私に渡すやいなや、息子は飛ぶようにして学校へ。

ところで、

「さァ、大変なことになってしまった。主人は大の猫嫌いだったのだ」。

子供達はそのことを知っているはずです。学校に遅刻したら、と思って簡単に引きうけてしまったが、さてどうしよう。

子猫は生まれて間もない様子で、あれこれとやっているうちに夕方になってしまいました。

そのうちに子供達も学校から帰り、主人もまた何時ものように帰って来ました。黙っているわけにもいきませんので、子供達とも相談し、猫の欲しい人を探すこと、それまで家で飼うということで、主人にも話しました。

猫嫌いの父に気を遣いながらも、子供達は猫の世話をし可愛がっていました。子猫も連れて来たときよりも元気になり、日増しに家族にもなつくようになってきました。

時には主人の帰る頃には道に出て、出迎え？　までするようになりました。

やがて、夏祭りの日でした。かねて約束していた農家の方が来られ、子猫はその方に抱かれるようにして、貰われて行ってしまいました。

構えながら熊に向かって行きました。

しかし、熊は逃げることも、向かってくることもしませんでした。皆はヘンだということになり、よくよくその熊を見ると、腹が大きく、ときには手足をピクピク動かして、立ち上がろうとする気配もありませんでした。

すると今までの恐ろしさもいっぺんに吹き飛んで、皆はぞろぞろと熊のそばに集まって来ました。それでも熊は全く動こうとしませんでした。

二八藏さんがそばに寄って見ると、熊は大きな腹をしてもう虫の息でした。

「オイ、この熊、病気かも知れんぞ、さァ生け捕りだ、しばって家に運ぶべ」

ということになりました。

皆は持って来た縄でしばり、棒を通して担いで運ぶことになりました。途中、吊り下げられて苦しくなったのか、熊は何回かあばれましたが、家に着く頃には静かになっていました。しばらくしてよく見ると、熊はすでに死んでしまっていました。

担ぎ棒をはずして、早速腹をさいてみると中からは、なんとふくれあがった数の子がたくさん出てきました。

「なーんだ、数の子泥棒はこの熊か。それにしてもよくもまァ、こんなに毎日、毎日食べたもんだ。干したものを食べ、川の水を飲んだもんだから、腹の中で数の子がふくれ、それでこんなになったんだべ」

と、二八藏さんは言いました。

それからというものは、二八藏さんの数の子藏には、もう泥棒が入ることはなくなったということです。

（『北の語り』創刊号・古平から）

音楽の思い出

大澤文子

ひそやかな音をたて渚辺に寄せくる朝の小波、まるで生ものの如・・・。「音」に対して私はなぜか異状な程の執念をもっていたあの頃。

初夏ともなれば晴れ空のもと、今にも何か奏でそうな気配にしばし耳をそばだてる。

たしか昭和二十四、五年の初夏の頃だったであろう。古い海沿いの橋を渡り、浜町への曲がり角のあたりに「花柳流」の師匠片石先生が、教室をもっておられると人伝てにきいた。

わが家の長女はまだ二、三歳の頃より、音楽がかかるとすぐ調子をとり踊りだすのが常だった。片石先生の教室のことを伺ったので、早速幼な子を背負い許可を得るため出かけた。お稽古場は二階にあった。片石先生は快く入門を許可された。

幼な子は悪びれることもなくお姉さん弟子達にまじり、小さな足でトントンと床を鳴らしご指導を受けたのだった。一週間に一度のお稽古日だったが、先生のご指導のもと、幼な子の踊りの曲目も日増しにふえゆき、懸命に覚えようとする幼な子、見守っていたが、程なく片石先生は余市へ越してゆかれた。

町中は三味線の音に触れることもなく暮れゆく日々だった。残念な思いはしばし続いた。心を満たす何かを求めていたのだろうか。憂うつな日々が続いた・・・が、うれしいことに数年後には、古平中学校へ橘校長先生が赴任されたのだった。

それにご夫人は「山田流」のお琴のお師匠様と伺ったときのうれしさ、もろ手をあげたのは私だけではないであろう。会場は割烹料理店大黒屋のお座敷と決定。いち早く町内の少女達はわれもわれもと教えを請いに集まった。ご多分にもれず、いまだ学齢前の五歳の長女も早速お仲間に入れてもらうことができた。お琴は幸い私の若かりし頃のがあり、同じ「山田流」だったのでホッとした。

お稽古日がくると幼な子はセルロイドのピンクの小箱にお琴の「つめ」を入れ、スキップをしながら教室へゆくのだが、小箱の「つめ」が足音と共にコトコトと鳴り、まだ幼い姿に浜町の知り合いの人が、

「みこチャン！お琴へゆくの、いいわねぇ」

と、よく声をかけて下さったという。

お稽古を終えて帰ってくるとすぐ練習をはじめるので、いつも窓際の部屋にお琴を据え、小座ぶとんを敷き幼な子の帰りを待つのが常だった。

十三の弦を力強く弾き「ヒ・メ・マ・ツ・コ・マ・ツ」と、よい音色で弾いている長女を肩越しに眺めホッとするあの頃だった。

「さくら、さくら」のお稽古もすみ、「六段の調べ」も間近かと楽しみにしていたあの頃。

年に一度の発表会には、中学校の末政先生の指導をうけ、お琴の伴奏で舞踊に出演したこともあり、古平の町中はお琴の音色に耳をかす人が多く、楽しい日々が続いた。

音楽の音色は人々の心を慰め、そして心をふるいたたせるのに充分であったろう。

今思えば・・・亡き父は物理学の教師だったのに音楽大好き！学校から帰ってくると必ず一室にこもり、SP盤のクラシック音楽をきいていた。

いつの日か、私は父の留守の時を見計らいこっそり父の部屋に入り、父の大切にしていたSP盤の悲歌（エレジー）をかけひとり涙したことがあった。

ふと思い出し、純情だった少女の頃もあったなァ・・・と、ひとりごとを言う。

＝先日、わが家に顔をみせた長男は、いつになくしんみりと、

「学生の頃、よく札幌のおじいちゃんからクラシック音楽会へ連れていってもらったなァ・・」

「今にして思えば、僕がクラシック音楽に夢中になった下地は、今井の祖父のおかげだよなァ・・・」

と呟く長男の顔・顔・・・＝

札幌通信 第41信

父の想い出

吉川義雄

私にとって、幼児期から小学校を卒業した頃まで、父の存在は随分とウットウしいものであった。

父が家に居ない出稼ぎどきなど、子供心にも、頭上の重石が取り除かれた気分であったことを覚えている。

七人兄妹の内、父にとって一番可愛いいはずの長男が、深く父を嫌うようになるには、それなりの順序が存在していたことは確かで、私自身がそれに気づき、父に対する意識を変え始めた随分後のことであった。

祖父の実子ではない、私の母のところに婿養子として縁組した父は、男ばかりの兄弟の三男坊で、奔放な行動の多かったことを伯父さんからよく聞かされた。

母と結婚して私が生まれても、祖父母との折り合いが悪く、私にモノ心つく頃でもわが家の空気は、いつもトゲトゲしいものあったことを覚えている。

私か小学校の頃、何かの必要で戸籍の文書を見たことがある。その時の驚きを今もって忘れていない。私の存在は、母の私生子となっていたのである。

血相を変えて親達に喰ってかかり、誰かが役場に走り、すぐに正常な戸籍抄本が私に渡ったことがあった。

「出たり入ったりサメの子……」と、他人からも揶揄された。父の婿さんぶりも、六人の子供の誕生と祖父母の老化と共に、次第に存在を重くし、大切な父親と変化を遂げた。

戦前。私の書店奉公の五年間、父は何かと言いわけを並べては札幌にやって来た。うるさい程の回数だが、古平時代には想像もつかない子煩悩ぶりを見せつけられ、心からうれしい真の父親を見る思いだった。

戦争の始りと終りの頃、相次いで祖父母が亡くなり、家長としての存在を確定した父は、子供達への愛情表現も自由になり、トゲトゲしい怒声は発する必要もなくなったようだ。

海軍に召集された私に付き添い、いくら断ってもついに余市の駅まで離れず、走り出した汽車を追いかけ、狂ったような叫び声をあげながら、ホームの端まで駆けて来る父の姿を生涯忘れることはない。

戦争に行ったはずの私は、幸運に次ぐ幸運の連続で、終戦は最も安全な台湾で迎えた。

幸運はさらに続く。終戦時、お尻にできたデキモノのおかげで白衣を着せられ、名誉の戦傷者よろしく、船の中も、汽車の中も大切な扱いを受けながら、登別温泉にある、旧海軍病院まで丁重に届けられた。いち早く父がとんで来た。

私が必ず帰って来ると信じて疑わなかった父は、驚いたことに、余市周辺の村に買出しに出る度に、私の嫁探しまでもやっていたことだ。

古平に落ち着いて間もなく、父のメガネにかない、ひそかに決めていた娘さんの家に、半ば強引に私は見合いに行かされ、のどかで平和なその村を好きになって帰って来た。

戦争から帰ったばかり、今度は親の傍で少しは親孝行のマネゴトでも…と、殊勝な心情もあったから、特別オチドもない娘さんをいだくことをあっさり承諾した。

長男が生まれたとき、「なア、俺が抱いて寝ていいだろ……」と、父は赤ん坊を離さなかった。私が生まれたときも、父はそしたかったに違いない…と。父の長い間の想いと夢をかなえさして、涙が出たことを思い出す。

古平と私

一、度肝を抜かれた話

葛西庸三

古平小学校へ赴任したのは今から二十八年前の昭和五十三年（一九七八年）四月四日であった。

勤めてから三十年近くの間、雪深い羊蹄山麓周辺の町や村をほっつき歩いていたので、海の街に勤めるのは初めてのことであった。

それでも私は仕事の関係で何度か古平町を訪れてはいたが、妻と小学五年生になる息子は全く初めての土地であった。

しかし、小学校入学から四年生まで、小さな複式校で過ごした息子は、やっと大きな学校へ転校できたと言って、喜んでいた。

着任して少し落ち着き、校舎周辺を探索して驚いたことは、校門の坂の左側に巨大な石碑が鎮座していることであった。

その大きさにぶったまげて、私は腰を抜かした。巨大な石碑の左側に副石があるのだが、それだって結構大きいのである。

この『ふるさとの礎』と刻まれた石碑は、古平小学校開校百周年を記念して建立されたものだ。

美国川上流から採石した自然石で、高さ三メートル、幅三・六メートル、下部の厚さ一・五メートル、重さは三十トンを超す。

古平小学校開校百周年記念誌「世紀のあゆみ」の中で、水見喜多利氏は「ふるさとの礎」という文字は、古平小講堂の入口に掲示してある吉田一穂の「灯を消さすあれふるさとは吹雪の中に」という額と、古平高校の一穂直筆の校歌の一節「ふるさとの礎たらん」という言葉から「集字」したと書いている。

だからこの石碑の言葉は、一穂のふるさとを思う心と、水見喜多利氏のふるさとを思う心が一体となってできあがったものだ。

これは凄い、歴史に残る快挙だ、と私は心の底から唸った。

その時の重い感動は、古平を離れて三十年近く経っても心の底に焼き付いて離れない。

私が赴任した時、「灯を消さすあれ　ふるさとは吹雪の中に」の額は、職員玄関を入ると真正面の上部に掲げられてあったが、今はどうなっているのだろうか。

もう一つ度肝を抜かれたことは、昭和三十九年（一九六四年）九月九日に竣工式を挙げた古平小学校の校舎である。

総工費二億三十七万円、道内最初の鉄筋校舎、町予算の二年分、町民税の三百年分を投入したという。

当時は、東北・北海道随一の校舎と言われた。

私が赴任した時は建築から十四年経っていたので、廊下のタイルも修理の結果色とりどりの花模様になっていたり、原因不明の雨漏りもあったが、しかし、伊藤由松町長の炯眼と英断で建設された当時の威容が厳然と残っていた。まさに「威風堂々」の容姿であった。

私は校舎の中をつぶさに歩き、ある時は屋上から、またある時はグランドから校舎の全景を眺め、伊藤町長が教育にかけた熱い思いに打たれるのであった。

思えば北海道開拓の苦難の鍬を振るった先達が、最初に取り組んだのが子弟の教育であった。自分の子孫の繁栄を願い、浄財を出し合って学校をつくった。

「町づくり人づくり」というこの考え方は、北海道開拓の端緒から引き継がれてきたものだが、古平の町はこの精神を力強く継承し開花させた。見事なものである。

だから古平から多くの人材が輩出し活躍している。

今、各地では人口減で地域は寂れているが、だが古平の町の中には太く強く逞しい開拓精神が生き続けている。それは進取の気性に富んでいるからだ。

私は『ふるさとの礎』の町、町予算の二年分を投入して建設された古平小学校で生活できた幸せを、しみじみと有難く思うのである。

＜続く＞

初めて渡った北海道、東京から、辺地の漁村である古平町に嫁いで来て、明治四四年から大正一三年までの一三年間、小学校の教員も勤めた梅野モンが、その見るもの聞くものへの興味と驚きを、東京の友人に書き送った手紙があります。

当時の様子の一面を知ることができる資料でもあり、2回の連載として、その1回目を先号でご紹介しましたが、昔の「候文」で読みにくいというご意見もあり、今回、改めて現在の表記にしてみました。

再度ですがお読み下さい。

明治末―古平に嫁いで来て
東京の友人への便り

梅野モン

発信九月十八日
（明治四十四年）
北海道後志国古平町
梅野清太郎方　梅野モン

うれしいお便り、知る人のないこの北海道へ来て読む一字一字もうれしく、繰り返し読みました。

さて、私も当地に来てから早や一年半ほどになりました。さすがはアイヌが住んでいたという蝦夷が島、すべての風物が内地とは全く違っております。広々とした荒野は大半が開拓され、山にはエゾマツやカラマツなどの林があり（内地の松など一本もなし）、町には新しい低い家が点々、蔵はすべて石蔵など、まことに新開地らしく、初めて渡って来た私は、満州へでも渡ったような感じがしております。ではこれから、当地の模様など少しばかりお知らせいたします。

鰊漁況

当地で最も壮快なのは鰊漁です。毎年三月中旬から漁期に入り、当地ではこの間をニシン場と言っております。いよいよニシン場になると人口は倍にもなり、いろいろ迷信的な行事も行なわれます。

漁夫はみな着物にもも引き、脚絆（きゃはん）、手袋にいたるまで、真紅の毛布で作ったものを身につけております。

さて、いよいよ産卵のため鰊が群れをなして海岸に寄って来ると、海水が白色ににごり、漁夫は赤い衣に身を包んで、筋骨たくましい若者は、身を切るような北風をものともせず、舟歌おもしろく櫓（ろ）拍子そろえて、数百の漁舟がたちまち波間に浮かびます。

夜になると、幾回となくヤッシンヨイサァ（アイヌ語）の声と共に網を起こし、東天のほのぼと白む頃、鰊は水中の大きな網袋に充満します。夜の明けるのを待って海岸に運ぶと、海岸はたちまちにして鰊の山を築き、折からの旭日が静かに照らすと、鰊の山は青色または銀色に輝いて、壮絶：快絶―、とても筆や言葉では言い表わせない光景です。

しかし、これはニシン場のまだ序の口で、私は本年の四月、父の訃報で帰ったので最も盛りの時の有様はまだ見ていません。いずれ次回でも詳しくお知らせいたしましょう。

苹果園（りんごえん）

次ぎは当地の苹果園の広いことです。北海道は漁業と共にまた農業が盛んで、開墾地の大半は苹果園です。本年は例年にない豊作で、見渡す限りの苹果園には累々と実ったりんごが映り、内地の黄金の波打つ景色にも劣りません。

この度、皇太子殿下の行幸があり、余市町のある苹果園の大農園主は殿下の供覧に、三千円ほどの紅白の縮緬（ちりめん）で袋を作り（普通ならみな紙で袋を作ってかぶせる。越後の梨のように）、りんごに掛けたとのことです。

アイヌ

裏手に、アイヌの掘立て小屋二、三戸あります。彼等の男は顔、手足など毛がいたって多く、私の知っているマカンケイ（アイヌの名）というアイヌは、額に●●●のような入れ墨をしております。このアイヌはマカンケイというのがもとの名前ですが、戸籍では古賀竹松です。なんでも松前の殿様の命名だと言っております。女は鼻の下、腕、胸など

丸山烽火台

瀧内優子

烽火台見むと登り行く心地よき海風われの肌を渡りゆき

遊歩道の唐松林の落ち葉厚く柔軟にして絨緞の如く

見渡せば松の根方の一ところ座禅草の咲く苞につつまれて

遊歩道登りつめれば群青の海展けゆき絶叫をあぐる

オロシアの防御に備え狼煙あげ近隣の町へ合図せしと

烽火台狼煙あげしは定かならず消炭残るは誰だれの業や

丸山の頂に佇ちて海岸の断崖絶壁にこころ奪はる

烽火台隔たる海に遠く見ゆ霧にかすめる雄冬連峰を

厚苫、黄金岬宝島遠く積丹のマッカの岬見ゆ

神々の快楽のごときと思ふまで積丹の海の長き夕映え

に入れ墨をしております。彼等の言葉はもう純然たるアイヌ語ではなく、独特のアクセントで日本語を話すので、時にはこっけいに聞こえます。それと、濁音をなかなか使えないようです。

また彼等は非常にお酒が好きで、彼等のことを知りたいと思ったら、徳利（とっくり）を持って訪ねれば喜んで迎えてくれます。そして酒を飲むときは、先ず箸（はし）の先に酒をつけ四方に振ります。これは天の神・地の神、及び義経に捧げる意味なのだそうです。彼等は非常に義経を崇拝し、義経に関するいろいろの伝説も伝わっております。

彼等は生活の習慣も違い、多くは生活に難渋しているので、役場から一日米三合の割りで手当てが出ているとのことです。酔えば楽しく歌う姿を見ていると、昔は勇猛を極めたという彼等への哀愁を禁じることができません。

北海の都

本年の夏、皇太子殿下の奉迎を兼ね札幌、旭川地方を旅行いたしました。どこも街並みが碁盤の目のように整然としていて、まことに便利なことには感心いたしました。

樺太へも渡る予定でしたが、船の都合にて渡ることができず残念に思っております。その節は、またお知らせいたします。

つまらぬこと乱筆でながながと書き連ねましたが、これにて筆を止めます。では皆様ご壮健にて。

× × ×

※ 梅野モンは明治四四年四月から大正一五年三月まで、古平小学校訓導として教員をしていました。

在職中、古平婦人会創立に尽力し、副会長を務めていましたが、昭和四年死去しました。

明治四四年の古平町統計表がありますので、それによって当時の状況を見ますと、戸数一，三六一戸・人口七，四〇四人、うちアイヌの戸数一五戸・人口四二人、

鰊漁では建網四六戸（八二か統）・刺網二九七戸、鰊漁獲高二九，五〇〇石（二二，一二五トン）、

漁船＝三半船・川崎船五四九隻、磯船四九二隻、

専業農家一八七戸、耕地五三六町歩（ヘクタール）、水田三反（〇・三ヘクタール）

米二石、リンゴ一七，五五〇本・収穫高二九，六八五円、

女子勤労挺身隊員として
――前号～お礼の言葉――

中村フミ

前号に、戦時下での青春時代の体験を書いてくださいましたが、同じ古平町出身の方から大変お世話になったそうです。その時のお礼をかねてということで、一文を寄せられました。

◇　◇　◇

私達が横須賀へついたのは一二月の初め頃でした。前にも書きましたが、楽しみといえばラジオを聴くことと食事でしたが、コウリャンというイナキビに似た穀物が主食でした。

幸いその頃は、私達のところは空襲を受けませんでしたが、空襲を受けていた東京のものすごい火の手が、毎晩のように私達の寮から見られました。

働いていたのは軍需品の工場でしたが、交代でお正月休みになりました。私達がここで働いていることがどうしてわかったのか、そのお正月休みに、同じ古平町の入船町に住んでいたという人が訪ねて来てくれました。

本間ゆうじさんという方で、古平の人は「アメやさん」と呼んでいるそうです。郷土の人が訪ねて来てくれたというので、寮の許可も出ました。そして私達を自分の家まで連れて行って、お雑煮を作って食べさせてくれました。

戦時中の物の無いとき、毎日の食事も満足なものを食べていませんでしたから、そのお雑煮のおいしかったこと！　真白いお餅がまぶしく見えました。思いがけないご馳走に、ほんとうにほっぺたがおちるようでした。恥ずかしい話ですが、みんな食べることに夢中で、無言でただ食べていたように思います。そして、本間さんは私達の電車賃まで払ってくれていたんです。

本間さんは、海軍に志願してこの横須賀に来ていると聞きましたが、何を話したのかも今は思い出せません。きちんとお礼を言って寮に帰ったのか、あまりのうれしさと感激で、ボーとしていたのではないかと、あの時のことを思い出すと申しわけないような気持ちでいっぱいです。お礼の言いようもありませんが、「どうもありがとうございました」

◇　◇　◇

いま落ち着いて、六〇年前のことを振り返りますと、あの時の気持ちは何とも言いようのないほどの感動でした。本当にありがとうございました。

その後もいろいろなことがありましたが、私も、嫁として一家の仕事をやって来ました。しかし、若いときは病気がちで、二回もおなかを手術しましたが、歳をとってからがかえって丈夫になったようで、いま八三歳ですがひとりで何とかやっております。

町長さんや、たくさんの方のおかげで、今は《元気プラザ》というよい所へ入れていただいて、毎日を幸せに暮らしております。

ありがとうございます。

＊＊編集雑記＊＊

▽先月の二〇〇号はページ数も二倍の三二ページとして、執筆に加わってくださった方も増えたことから好評で、一〇〇部多く六五〇部印刷しましたが、手持ちの数部を残して出尽くしました。雑誌は新年号が豪華ですので、その頃にでも、またページ数を増やして発行したいと考えております。これを機に、どなたでも気軽にご参加下さればありがたいことです。

▽五月に例年開かれている『**生きがい学級**』があり、参加者は少なかったのですが、お集まりの方から「**昔のことについて**」いろいろとお話をお聞きしました。戦争という時代の体験から「**食**」がその中心でした。近い内にそのことをテーマにして紹介したいと思っております。

▽先日、南寿会の福井会長さんと、会員の方との懇談の機会をもちたいということを話し合いました。「**歴史の証人**」とでもいう方々ですから、当然、期待も広がります。

▽今まで冊子として発行して、ご要望の多いものを再度発行する計画です。その都度**せたかむい**紙上でお知らせいたします。

老兵の綴り方

あゝ樺太国境守備隊

〈42〉　橘　義春　［遺稿］

八月十七日〔晴れ〕
逃避行を続け、八方山へ到達する　～続き

川を渡って、森の中を歩いて行ったら道路に出た。

この道路が八方山の連隊本部へ行く軍道らしい。ここまで来ると、敵はまだ来ていないようだ。意外と皆はのんびりしながら歩いていた。

何回か敵の飛行機から機銃掃射を受けたが、林の中へ逃げ込んで難を逃れた。ただ怖いのは、敵の砲弾が無差別に落下することだった。相当に口径の大きな大砲らしく、砲弾が落ちた地面には直径五メートルぐらいの穴があき、広い範囲に土砂や破片が飛び散っている。これさえ気をつけていればまず大丈夫だ。大分歩いて、軍道の土手に腰を下ろして休んでいたら、突然、素っ頓狂な声がした。日本語ではない。敵だ！

それっと道路に散開して銃の安全装置を外して狙いをつけた。相手は慌てて道路の側溝の中へ転げ込み、

「おれは味方だ、味方だ！」

と盛んに怒鳴っているが、どうも怪しい奴だ。それにしてもさっきの声は日本語ではなかった。

樺太には土着の民族が国境付近にたくさんいる。ギリヤーク族・オロチョン族・ダッタン族などがいて、彼等は日本語も上手だ。ひょっとすると敵のスパイかも知れない。

「ヤイ！　手を上げて出て来い！」

恐る恐る両手を上げて立ち上がった相手の顔を見ると、頬が痩せこけていてギリヤーク族そっくりだ。だが、よく見ると日本兵の軍服を着ている。

「お前は何中隊だ」

「ハイ、四中隊です」

「どうして変な声なんか出したんだ」

と言うと、

「自分は合言葉を言っただけです」

よく見ると、彼はギリヤーク人ではなく本物の日本兵らしい。しかし、どうも様子がおかしいので聞いてみたら、合言葉は『百戦』と言ったら『必勝』と相手が答えて、それで同士討ちを避けるためのものであった。ところが、この兵隊はまだ軍隊の経験も浅かったため、合言葉の意味がよく分からなかったようで、味方を発見したので嬉しくなり、思わず『百戦・必勝』と叫んでしまったのだと言う。おまけにヘンな長ったらしい節までつけて叫んだので、誰もそれが日本語だとは思わず、危うくギリヤーク族のスパイなんかと間違われ、射殺されてしまうところだった。

彼は四中隊で、師走陣地での戦いで生き残り、古屯で三中隊に編入された。それが古屯の陥落で生き残り脱出して、一晩中、森林の中を一人でさまよっていたのだという。さぞかし心細かったことであろう。

とにかくこれで戦力は十人になった。曹長は何だか元気がなく寡黙だ。先の挺身切り込みに失敗し、部下を失い、軍人の魂でもある軍刀まで失ってしまった。これから隊に帰って何と報告したらよいか、指揮官として頭を悩ましているのではないだろうか。その気持ちは痛いほど分かるような気がする。曹長と私はこの僅か半日間で、互いに信頼という連帯感が生まれたが、力になってやれないのが残念だ。

ブラブラと坂道を上って行ったら、やがて下の方に川が流れているのが見えた。師走川の上流かも知れない。川岸にムシロで作った掘っ建て小屋が一軒建っている。

〈続く〉

雑詠［六月号］主宰 水見壽男

盆梅の一三輪の香りかな　山口悦子
身春日和外れ馬券の宙に舞ふ
春立つも厚き衣や北に住む
冴返る昨日脱ぎしを又羽織る
残雪に積丹岳の息吹かな　越野敏雄
春日差す壁に陽炎蠢けり
引く波に足踏んばって海苔を掻く
早春の積丹岬風駆くる
凍ゆるむ風鳴り止まぬ夜明けかな
荒波の砕ける岬も春息吹く
鳥の声聞き春色にひたりをり
春浅し雄冬岬見す波のきら
寒明の潮目の船の脚軽し　室谷弘子
群青の海に紛れし余寒かな
張りつめし五感ゆるみて寒明くる
荒磯に寄する小波や春立ちぬ
船頭の風を読み取る漁始
北国の山河が光る初景色　色外山俊久
北国の墨絵の山河鶴が舞ふ中
船だまり幟たなびく初茜

【句評】高橋重子

雪の庭一つぽつりと寒椿
春寒の空半分の青さかな　渡辺嘉之
立春は海より来たり戻ったり
鴎翔ぶ春立つ光散りばめて
解けゆく日差し捉へて春立ちぬ
海に湧く風みな春の波となり　堀典子
空に張る枝のびやかになりし春
吹きさらふ波音強し凍返る
音をたて風渡りくる二月尽
海に降る雪たちまちに海となる
背を丸め残る寒さの歩幅かな　本間寿昭
出漁に春の足止め降り続く
雪解風大地の目ざめ漁場移る
凪ぐ海を染めて行きけり初茜　越野清治
雪しまきつつ落葉松を去り行けり
厳寒に立ち向ひ航く漁船かな
寒月や波の背に乗り沖に在り
氷面鏡日差しあまねく拾ひをり

【句評】

■『俳句朝日』四月号　今井千鶴子選

一陣のシベリア風紅葉散る　越野清治

■北海道新聞『日曜文芸』高橋笛美選

古平の港の明かり寒に入る　本間寿昭
雪卸し終りし番屋背伸びかな　本間寿昭

怒濤

[11]

古平俳句会

―六月―

春光や小樽運河の海猫浮ね　斉藤波留

句の敵も従兄弟同士や春句会

夜目遠目雑木林の辛夷かな　山口悦子

九十年父の履歴書日永かな

初蝶の網目にこ粉こぼれをり　越野敏雄

手を翳す蝌蚪の鼓動を水に聴く

強東風に小雀飛べずうろたへり　大和田絵伊

早春の朝の空気の旨かりし

あぶなげに跳ねて親追ふ仔馬かな　高橋重子

はなれ住む娘案じて月おぼろ

磯波の光集めて夏近し　仲谷比呂古

浜風を大きく吸って鯉幟

春潮に揺るがぬ漁父の業光る　室谷弘子

海鳴や句心揺らぐ春の宵

孫を抱き至福の春を満喫す　外山俊久

別れ雪一片肩に残りをり

春愁や独りに大き空のあり　渡辺嘉之

春の星道のしるべと瞬けり

地を蹴つて空に飛び出す半仙戯　堀　典子

潮騒に春の光のこぼれ来る

春の浜手真似の多き立ち話　本間寿昭

防風林過ぎて廃屋藤盛る

真つかうに卯波寄す浜丘に句碑　越野清治

野の風を振り切る雁の別れかな

短歌

古平町岬短歌会

挽きてすぐ作りてくれし蕎麦の味薪ストーブのあたゝかき辺に　池田テル

心とは模細工のやうにもろきもの春風に舞ふ粉雪に似て　金子寿子

古稀祝ひ書の友よりの花束は柔かき日差しに赤きバラ開く　坂本信子

温む日に誘はれ来しが若蕗の生ふるあたりはまだ雪深し　鈴木時子

漁船は遠く近くに白く見え青色日に増す春の海原　田中香苗

やうやくに陽光春めく磯岩に渡り鴎ら低く飛びかふ　丹後初江

「活きよいよ」と貰いしソイはバタつきて刺身の前に右手ささるる　寺田清治

雨降りて雪解けすすむ川岸に猫柳の芽丸くふくらむ　東美知

白き雲うきて流るる春空をうつし海面は静かに凪ぬ　堀典子

俳句

古平俳句会

早春の背山とび立つ鳶の笛　斉藤波留

結納の桜湯の味米寿来し　山口悦子

初蝶に自転車越されこされけり　越野敏雄

早春の漁する沖は荒止まず　大和田絵伊

ドライブに羊蹄山のどけく裾を引く　高橋重子

大卯波聴き取る声を呑みにけり　仲谷比呂古

日矢差して青一枚の春の海　室谷弘子

北の地に辛夷ふくらむ頃となり　外山俊久

春光を離さぬ波のありにけり　渡辺嘉之

ほどけゆく白木蓮の光かな　堀典子

春の使者沼を狭しと声白し　本間寿昭

灯台を過る雲あり燕あり　越野清治

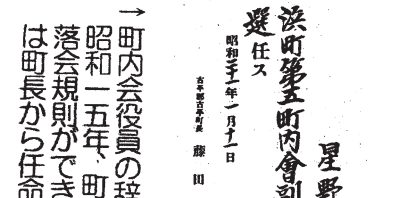
古平町史年表

昭和２１年（1946）～続き

▲GHQ（連合軍総司令部）から４名が公職追放の指定を受ける
▲ホトトギス同人の鮫島交魚子が来町する
▲古平青年学校が廃止になる
▲電力が不足して断続的な停電やローソク送電が続く

昭和２２年（1947）

▲余市国民勤労署が小樽勤労署余市支署となる
▲町内会・部落会・隣組が廃止される
▲新学制による小学校が発足し、町内の国民学校が小学校と元の名称に戻る
▲町長選挙に３人が立候補し、初の民選町長として大澤吉三郎が当選する
▲新学制による新制中学校が発足し、古平中学校・稲倉石中学校が開校するがそれぞれ小学校に併置される
▲古平中学校初代校長に太田又蔵が発令されたが、赴任しないまま退職する
▲小樽勤労署余市分署が小樽公共職業安定所余市出張所と改称し、従前通り古平町はその管轄下になる
▲古平中学校が校章を制定する
▲古平町議選で平田リキが初の女性議員に当選する
▲底引網漁業について戦時特例法が廃止される
▲古平消防団設置条例が制定される
▲古平国民学校保護者会を解散し、古平小学校父母と先生の会を結成する。会長蓮実豊光
▲大相撲横綱前田山一行の地方巡業が、勧進元桐沢定吉により古平小学校校庭で興行する
▲小樽労働基準監督局が設置され、古平町がその管轄下になる
▲古平中学校第二代校長に千葉清一が発令、着任する
▲余市営林署が設置され、古平・稲倉石２ヵ所の担当区事務所が置かれる
▲古平中学校父母と先生の会が結成される。会長には小学校と兼ねて蓮実豊光が選出される
▲余市税務署が新設され、古平町は小樽税務署から余市税務署管轄になる
▲北海道鰊合同漁業㈱が解散する



→町内会役員の辞令
昭和一五年、町内会・部落会規則ができて、役員は町長から任命された

↑古平小学校に併置された古平中学校の玄関口（現在の文化会館の場所）

→戦後の婦人参政権により、古平町議会初の女性議員に当選した平田リキさん

鰊合同漁業㈱の株券 →